

# レベッカ・ソルニット来日記念連続企画

## 「世界は変えられるという予感

### —3.11／原発人災／〈占拠〉と街頭の公共性」報告

小田原 琳

発端は、ニューヨークの知人からの、レベッカ・ソルニットが来日するという知らせだった。それは私たちにとって、大きな意味のあることだった。なぜなら私たちは、2011年3月以来、彼女の『災害ユートピア』（原題『地獄に建てられた天国』）を、ひとつの心の拠りどころとして読んできたのだったから。そこから、この災厄と希望の年をどのように記憶し、ことばにすればよいかを問う、三つの連続企画がはじまった。

#### 第一企画 高円寺「素人の乱」とウォール街占拠を結ぶ

2011年のはじめ、私たちは中東の民衆がうねりとなって立ち上がるのを、固唾をのんで見守っていた。「権威主義体制」と呼ばれながら、西洋世界から一定の独自性を保って持続していた中東諸国の長期政権が、民衆の抗議によって揺らいでいた。1月にはチュニジアでいわゆる「ジャスミン革命」が、2月にはエジプトで、広場の占拠と自由の代名詞ともなったタハリール広場を埋めつくしたひとびとが、新しい時代をつくりつつあった。リビアでは革命としてはじまったものが、NATOの介入によって凄惨な内戦になっていた。それはシリアへ、バーレーンへ、のちにはイスラエルにまで波及する歴史を画する動きとなっていた。私たちは見ていた。そのときはまだ、好奇心と、他者的なまなざしで。

世界を遠くに見る私たちの日常を根底から覆したのは、文字通り、揺れる大地だった。2011年3月11日の地震と津波につづいて、12日と15日には、福島第一原発で原子炉が爆発して、東日本の住民は極度の緊張の下におかれた。テレビやネットの画面を通して、根こそぎおしながされた沿岸部を、白煙を

あげる原子力発電所を見ながら、私たちは次になにをすればよいのか、日常生活をつづけることはただいいのか、まさしく宙づりの状態にあったといつてよいだろう。その奇妙な呆然とした状況をつきやぶったのは、高円寺のアクティヴィストたちの呼びかけによって組織された、4月11日の反原発デモンストレーションだった。高円寺駅からゆるやかな坂をくだって集合場所の公園までを、ひとが埋めつくした。デモが出発すると、同じ道をこんどは逆方向に、ひとが埋めた。「原発やめろ」という単純な、しかし心の底から発せられる声が、東京の小さな町に響きわたり、私たちはみずからにかけられた呪縛を解いた。そしてそのときから、タハリール広場や緊縮財政に抗議するひとびとのあふれるスペインのソル広場、ギリシャの街頭は、私たちのものになった。原発事故に対する日本政府の隠蔽につぐ隠蔽、被災地のひとびとにさらなる苦しみを与えるような不誠実な対応に私たちの怒りは増し、9月には明治公園で開催された抗議集会には、6万人にのぼるひとびとが集まった。

今回の連続企画の第一企画として企画された「高円寺「素人の乱」とウォール街占拠を結ぶ」（2012年2月28日）では、このデモをよびかけた高円寺のアクティヴィスト集団「素人の乱」の松本哉氏、その友人でやはりアクティヴィストの樋口拓郎氏、政治学者の木下ちがや氏、編集者の池上善彦氏が、昨年4月以降、数度にわたって企画された近年日本ではまれに見る大規模デモと、世界の動きとの相互的な影響を、生き生きと語ってくれた。4人は2011年10月に、開始1ヶ月ほどで世界の注目を浴びていたニューヨークのウォール街占拠運動を訪れ、2011年の世界の草の根からの動きを、群衆のイメージーションとしても、人的なつながりとしても、私たちの

まえで再構成してみせてくれた。松本氏、樋口氏らは、ニューヨークのアクティヴィストたちとの交流を通じて、ウォール街占拠運動参加者たちが「ジェネラル・アセンブリー」に代表されるような、自分たちが作りだした直接民主主義的な空間をいかに誇りに感じているかを共感をもって語りつつ、また同時に、日本における運動はそれをたんに参照するのではなく、この社会に根をもったものとして独自に展開されていることを確信したと述べた。池上氏は、福島第一原発の事故を契機として、反原発運動が韓国や台湾、モンゴル、ドイツ、フランスなどでも噴出し、原発政策を推進する国際社会に対抗する民衆の共感と連帯がひろがっていることを指摘した。ウォール街占拠は 11 月中旬に強制排除により空間的な拠点は喪失したがジェネラル・アセンブリーは継続し、また占拠運動も、ブルックリンやハーレムなどニューヨークの各地区や全米 2000 箇所以上に拡散し、「われわれは 99%である」という大きなスローガンは維持しつつも、各地の地域コミュニティでの取り組みへと移行している。木下氏によれば、これは日本において原発政策に対する抗議が全国へひろがり、地域を拠点とした活動へと軸足を移していることと呼応している。この 2 月には、杉並区で、商店街などのひとつのつながりを核としたデモが組織され、5000 人を集めた。

## 第二企画 占拠運動と 19 世紀パリの民衆騒乱—喜安朗『民衆騒乱の歴史人類学—街路のユートピア』を読む

街路に出る民衆という私たちのイメージは、こうして空間的なひろがりを獲得していったが、同時に歴史的なつらなりをも意識にのぼらせた。原子力—とりわけ兵器としてのそれに関連していえばそれは 1954 年のビキニ諸島における水爆実験と、第五福竜丸の被爆、乗組員久保山愛吉さんの死を契機として爆発した原水爆禁止運動であったし、日米の軍事同盟のもとでの原発導入という経緯から、沖縄における半世紀にわたる反基地運動も、ようやく私たちに実感としてせまってきた。日本のみならず世界の歴史をどのようにとらえるか、その視角をも潜在的に規定してきたそのような闘いの歴史が、今日の日本

の状況のなかでふたたびアクチュアルな問題として浮上していることが、第二企画（2012 年 3 月 10 日）での、提題者の山根徹也氏（横浜市立大学・ドイツ近代史）、白石嘉治氏（フランス文学）による喜安氏の著作の読みから明らかにされた。もう一点印象的であったことは、喜安氏が 19 世紀パリの労働者たちの蜂起を可能にした条件において、「生活圏」のもっていた意味を強調していたことである。労働や娯楽、経験を共有することによって作りだされたひとつひとつのつながりは、蜂起の瞬間にも強固に生きる。それはまさに、高円寺において、杉並において、またブルックリンにおいて、街頭行動を生起、持続させているものでもある。

アメリカにおいて占拠運動にコミットしている知識人たち、マリーナ・シトリンやシルヴィア・フェデリッチらは、こぞつてこのコミュニティレベルへの運動のひろがりやを積極的に評価している。フェデリッチは占拠運動が街頭での大衆的な抗議行動にとどまらず、共同のキッチンや農園づくり、さらには占拠運動のなかで編み出された直接民主主義的な、水平的な人間関係のつくりにかたを、再生産の新たな包括的な形式として持続させるころみになっていることを指摘する。そこでは、哀しみや痛み、死など、政治的なもの—狭義の政治のみならず、私たちがおおよけの活動としているすべてのこと—の外部に結びつけられてきた経験をも社会化することが求められている、「ケアの共同体」あるいは「コモンズ」をつくりだすことが<sup>1</sup>。けれどもそれは、まさに私たちが、震災後に経験してきたことではなかっただろうか？

## 第三企画 《災害ユートピア》論から検証する 3.11

レベッカ・ソルニット氏は第三企画（2012 年 3 月 13 日）における講演のなかで、「災害は革命に似ている」と述べた。災害に襲われたとき、なにひとつ確かなものがなく、それゆえにすべてが可能な瞬間

<sup>1</sup> Max Haiven and Silvia Federici, *Feminism, Finance and the Future of #Occupy - An interview with Silvia Federici: Occupations and the Struggle over Reproduction*, Z Net, 25 November 2011  
<http://zcommunications.org/feminism-finance-and-the-future-of-occupy-an-interview-with-silvia-federici-by-max-haiven>

抄訳が『女たちの 21 世紀』No.69（アジア女性資料センター、2012 年 3 月発行予定）に掲載予定。

に、ひとはパニックになるのではなく、たがいを気づかう。それはサンフランシスコ地震やハリケーン・カトリーナの直後だけでなく、占拠運動のなかにも見られるのだと。たしかに私たちは、地震と津波による想像を絶する喪失や、目に見えない放射能の、予想できない影響への不安に圧倒されながらも、恐怖や他者への思いやりを共有するというまれな経験に喜びをおぼえた。その矛盾した感情をどう表現してよいかわからなかったとき、「地獄のなかに建てられた天国」「災害ユートピア」ということばは、私たちを支えた。そしてその後立ち上がった大規模デモのみならず、自主的な計測運動や、避難者支援など、草の根レベルでひとびとは、みずからの尊厳をかけて行動した。それぞれの意図はどうあれ、生命の問題を軽視しつつけた政府の方針に反するさまざまな動きは、ある種の革命的な色合いをおびていたということすらできるだろう。

しかし、それをユートピアと呼びつづけるには、私たちがおかれている困難はきわめて厳しい。第三企画におけるコメンテーターの渋谷望氏（日本女子大学・社会学）、ディスカッサントの林明仁氏（東京外国語大学非常勤講師・被災者支援 NGO にかかわる活動にたずさわる）は、震災以前に日本社会はすでに災害状態にあった一格差や貧困など、新自由主義が社会的インフラを壊滅的なまでに破壊していた一ことを指摘した。それゆえに、原発事故がもっともよく示すように、災害が長びくにつれて、すでに存在している社会問題はますます顕在化し、被災の程度にも格差が現れるのであると。ゆえに林氏は、他者に対するケアという意識が災害直後の現象にとどまらず、通常の社会問題にまで拡大され持続される必要性を強調する。

「災害ユートピア」の持続。ソルニット氏がその著書のなかでいくども強調している、ユートピアのはかなさーエリートによる意図的な破壊も含めて一との闘い。それがどれほど困難なことであるかを、いわく「絆」、いわく「がんばろう日本」、いわく「みんなの力がれき処理」。ナショナルな感情に訴える政府とマスメディアの宣伝／洗脳を通じて、私たちは骨身にしみて感じている。つまりそれは、危機を語る作法＝危機をマネージするエリートたちの作法

との闘いなのだ。だから佐藤泉氏（青山学院大学・日本近代文学）は、文化を組織すること、感性を組織することの必要性と可能性を強調する。私たちを内側から規定する日常を、労働の意味を、意識を、根底から覆さなければ、この災害／革命の意味を、つかむことはできない。その意味では、地震・津波という自然災害と原発事故という人災を通じて私たちが既存の権力や資本主義的な構造に疑念をいだいた、そのこと自体がすでに、ひとつの具体的な変化であり、2011年の私たちの街頭の獲得である。

滞在中にソルニット氏はいくどか、「ユートピア」は自分のことばではない、と言った。私たちが日本語訳のタイトルとして慣れ親しみ、愛した「災害ユートピア」という語を、彼女自身は多用していない。「どこにもない場所」という意味の「ユートピア」よりもむしろ、原題で使われた、アラビア語の「庭」に起源をもつ、「パラダイス」ということばのほうが好きだ、なぜならそれは、つくることができるから、と。私たちがこの目で見、手で触れ、感じているこの、まだ言いあらわすことのできない変化には、ユートピアではなくパラダイスということばがふさわしいかもしれない。しかしそれだけでもまだ十分ではないような気がする。私たちがこの変化を幸福だと感じるのは、そこに喜びと愛だけがあるような、オルダス・ハクスリーの描く世界のようなからではない。哀しみも死も怒りも対立も、すべて公的な世界の周縁におしやられてきたものがそこに深く存在していて、その存在をだれもが認めている、そのような「コモンズ」であるからではないだろうか。つまるところ、世界は変えられる。それはつねに予感であり、同時に現実である。ならば問いは、「変えられるか？」ではなく、「どのように変えるべきなのか？」でなければならない。終わりのなき災害に対して、倦むことなくその問いをくりかえすことに、この社会に生きる私たちの仕事はある。あるいはそれは街頭に、すでに出現しているのかもしれない。私たちはことばという不器用な道具で、それを追いかけるしかないのかもしれない。